

腕時計のミトロジー

Mythology of wristwatch

並木 浩一

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2017年3月18日 受理)

1. モンブランとミネルバ

2017年1月にジュネーブで開かれた高級腕時計の展示会 S.I.H.H. で、世界的ブランドのモンブラン Monblanc が発表した新作の一つが、「1858 クロノグラフ タキメーター」(リミテッドエディション) だった。2レジスターの手巻きクロノグラフは、1960年代のような設えである。クラシカルで上品なブロンズ製のその腕時計は、退色したゴールドのような風合いを見せる。

言うまでもなくモンブランは、世界に名を知られた筆記具、特に万年筆のリーダー的ブランドである。一方で、腕時計での本格的な経験は、1990年代からのことだ。すなわち、老舗ブランドがはじめた新領域である。しかしながら、「1858 クロノグラフ タキメーター」は、ニューカマーがはじめたオールドファッションな仕掛けというわけでは決してない。それは腕時計界の神話を構成する一柱の「神」、ミネルバ Minerva の書き継がれる神話を意図している。「1858」とはそもそもミネルバの創業年なのである。

始まりは2006年10月に遡る。この月、複数の一流ウォッチブランドを擁する企業連合体リシュモン Richemont が、老舗マニユ

ファクチュールを新たに傘下に加えたニュースが世界に配信された。金額は明らかにされなかったものの、ルクセンブルグの投資グループから売り渡されたのは、従業員僅か22名の小企業である。ヨーロッパのある経済アナリストは「この買収は2007年3月のグループ決算には影響はないだろう」と、素っ気ないコメントを寄せたのみであった。しかし腕時計を知っている人間にとって、このニュースは興味深い。当の老舗ブランドの名が、ミネルバであったからだ。腕時計に関わる人間にとって、この名前には特別の意味がある。ミネルバはスイスでも尊敬される時計メーカーの一つでありながら、過去数年その帰趨が危ぶまれていたブランドである。そのミネルバが腕時計を深く理解するグループに加わり、時計界のメインストリームに再び咲く希望が、短い記事の行間から覗けたのである。とはいえ最初は、このニュースが朗報なのかは不明だったのである。リシュモングループは、ムーブメントを自社開発・生産できるマニユファクチュールを複数擁している。ミネルバの立場はどうなるのか、この時点では全く明らかにはなっていなかった。

ニュースが明瞭に展望を示したのは2007年2月のことだ。モンブランがミネルバと共

同で研究機関を創設し、製作されたムーブメントは、モンブランが独占的に搭載することが発表された。

モンブランの時計製造は1997年から開始されている。筆記具の名門は、時計の世界でも誠実な造りのレファレンスを積層していった。意外ではありながら、モンブランとミネルバは絶妙の組み合わせである。モンブランは3世紀をまたぐ伝統と技術を誇る極上の機械を、事実上の自社製ムーブメントとして、独占することになった。一方、揺れる経営に翻弄されてきたミネルバの時計職人たちにとっては、落ち着いて時計作りに打ち込める最良の環境が、保証されたのである。買収という言葉にはしばしばネガティブな響きと、実際の悲劇が伴う。しかしこの件に関しては、悲劇的な要素はない。悲劇はむしろ、ミネルバが翻弄されてきた過去数年にあった。多くの人々が身内のことのように心を痛めていたミネルバの不遇は、終わりを告げた。モンブランにより、ミネルバは再興したのである。

2. ミネルバ前史

ミネルバは1858年にスイスのジュラ山脈、ヴィルレ Villeret に創業した。現在でも人口900人余りのヴィルレは、小さくのどかなコミューンである。

一方でこの一帯は、スイス時計産業を支える故郷の一部でもある。モンブランが時計造りの本拠を置くル・ロークル Le Locle にも近い。ヴィルレはブランパン Blancpain の創業地でもあり、隣町サン・ティミエ Saint-Imier は、ロンジン Longines が今も本社を置き、ブライトリング Breitling の創業地でもある。シュズ川の清浄な水と清涼な空気に恵まれたヴィルレの地には、スイス時計産業を貫く脈もまた流れている。ミネルバの創業者はシャルル・イヴァン・ロベールと、イポリット・ロベール。当初はムーブメントの組み立て専門メーカーであった。ミネルバの名前は1887年には既に商標登録され、1923年に社名となる。

1902年、現在も工房が置かれる建物に移転。懐中時計の製造を開始する。1906年創業のモンブランと同様、20世紀の開始とほぼ同時にこの企業の息吹は高まっていく。アロー(矢)を象ったトレードマークとともに、会社は発展していった。1911年からは、後に同社の救世主となるストップウォッチの製造が開始された。1935年、創業家のロベール家が経営から身を引き、従業員のジャック・ペローとシャルル・オースネルに事業は売却される。1936年、ドイツのガルミッシュ＝パルテンキルヒェンで行なわれた第4回冬季オリンピックで、スキー競技の計時に採用。ミネルバのストップウォッチが世界に知られるようになった。同時期にクロノグラフ・ムーブメントの歴史に残る名機『Cal.13-20CH』が登場し、ミネルバの声価は高まった。1940年に、エンジニア学校を卒業したばかりのペローの甥、アンドレ・フレイがミネルバの経営に参画し、以降フレイ家の家族経営の時代が続くことになる。そして1943年、アンドレ・フレイによる「キャリバー48」の誕生。数学上の黄金比を設計に取り入れた画期的なムーブメントは、以降50年間に亘り、同社を象徴する存在となった。ミネルバの黄金期は、既に始まっていた。

腕時計と並び、ミネルバを語る上で欠かせないのがストップウォッチである。1936年冬季オリンピックでの採用が示すように、ミネルバはこの分野では世界のトップを常に走っていた。更に独創的な技術を研ぎ、1950年代には完全に独走状態となる。当時、ミネルバは用途に応じて機能・仕様が異なる数十種類のストップウォッチをラインナップしていた。ヨットタイマー、スイムタイマー、フライバック、スプリットセコンドなど、様々な複雑機構も組み込まれた。また針が一周60秒のものだけでなく、10秒で一周するモデルや、1分を100分割表示する10進法のモデル(デシマル・タイマー)もあった。極めつけは毎時36万振動のムーブメントを搭載した超高速ストップウォッチである。針は

1秒もしくは3秒で一周し、100分の1秒を計測するこの機械式ストップウォッチは、後にギネスブックに認定される。

ストップウォッチ分野でのミネルバの独走を支えたのは、独自に開発したコイルスプリング機構である。ミネルバはストップウォッチの駆動系に従来使われていたフラットレバーを廃し、コイル型のバネに置き換えた。しかもミネルバはこの機構に絶対の自信を持ち、バネがもし壊れたらいつでも無償で交換するという「ライフタイム・ギャランティ」を実施している。高額なモデルでは同社のクロノグラフ並みの価格を付けたミネルバのストップウォッチは、プロフェッショナル用として世界中で愛用された。特に放送局での実績は抜群で、アメリカの三大ネットワークであるCBS、NBC、ABCは全て、ミネルバを公式ストップウォッチに認定。「ストップウォッチのロールスロイス」は、世界の放送関係者の憧れの名品となった。

ミネルバはキャリバー 48、キャリバー 13-20CHを中心としたラインナップで、腕時計の世界での確実なプレゼンスを得た。1950年代から60年代は、ミネルバ順風満帆の全盛期といってもいい。圧倒的な技術力を誇る小さなブランド。ミネルバの評価はヨーロッパ全体に伝わり、アメリカでも有力時計店が積極的に販売した。ミネルバの声価は、やがて全世界に広まっていった。

しかし、ミネルバを含むスイス時計業界は「クォーツ・ショック」の嵐に急襲される。1960年代の末に誕生した日本製クォーツは瞬く間に世界市場を席卷した。スイス時計業界、暗黒の10年の始まりである。高精度の機械式腕時計を誇ったスイスの時計産業は壊滅状態にまで追い込まれ、1970年には1618あったスイスの時計関連会社は1984年には632社にまで減少した。15万人を誇った就業人口が、3万人にまで落ち込んだ。この嵐の時期を、小規模のミネルバが乗り越えられたのには理由がある。それは、世界で熱望されたストップウォッチの恩恵であった。クォー

ツが不得手とした高トルクの大型アナログ表示では、ミネルバの機械式が圧倒的に勝っていた。機械式ストップウォッチのトップブランドは、嵐が過ぎ去るのを待つことができたのである。やがて機械式再評価の流れの中で、ミネルバは機械式腕時計の生産を再度本格化させる。お家芸の機械式ムーブメントであるキャリバー 48、キャリバー 49の魅力が再評価され、ミネルバは機械式腕時計ファンの支持を再び勝ち得た。他社から供給されたベースムーブメントを搭載したクロノグラフも、ミネルバの手にかかると魔法のようにモディファイされていた。

しかし、手作業により、大量生産のきかないミネルバの経営は決して楽なものにはならなかった。高い人気の半面、供給数が極めて少ない逸品。従業員20名程度が、手作業をフル稼働させても生産できる数には限界がある。ミネルバは通好みの希少な腕時計として知られる存在であった。しかも、量産に走ろうとしない姿勢を貫くフレイ家のアンドレ・フレイ、ジャン-ジャック・フレイ親子は、業界内での尊敬を集める、スイス腕時計の良心のような存在だった。

3. 神話とその崩壊

目的は正しくとも、方向が間違ってしまうことが世の中にはある。

ミネルバは20世紀末、長年の家族経営に終止符を打ち、イタリアの投資グループに売却される。この売却は、機械式の新ムーブメント開発のための資金導入が目的であったと言われる。特に、生産が絶えて久しかった「Cal.13-20CH」の後継となるはずの自社製クロノグラフ・ムーブメントの開発は、同社の悲願だった。その目的を果たすべく、フレイ前社長は新経営陣の役員として留まるが、ほどなく離脱を余儀なくされた。フレイ家の望む方向に、ミネルバの舵が切られることはなかった。もともと腕時計には無関係の新たな経営陣の下で、ミネルバの誠実さとは裏腹の派手なニューモデルが企画され、ミネルバは

本来の輝きを失うことになる。やがて新作の供給は滞り、歴とした代理店がある日本への入荷も、全く時期が読めなくなった。すなわち、過去に滅びた多くの腕時計ブランドと同様、その命脈は尽きようとしているように見えた。

一方で、失われたミネルバの名品達、キャリバー 48 搭載の「ピタゴラス」、キャリバー 20 を搭載したクロノグラフはヴィンテージ・ウォッチ市場で高騰を続けていた。ヴィンテージの範疇には入らない数年前のモデルが発売時の価格を上回るという、世界でも幾つかの人気ブランドにしか起こらない現象が、ミネルバにも起きたのである。

腕時計をとりまく人々がその時、再認識したことがある。ミネルバは腕時計の良き時代を象徴する、実に偉大な、尊敬に値する存在なのである。現存するにもかかわらず、ミネルバの名は、神話性を持って語られるようになっていった。世界中の時計関係者が敬意を払い、最大のシンパシーを抱きながら、救えないミネルバ。機械式腕時計ブームの中、腕時計に関わる多くの人間が、この原罪意識を少なからず背負うことになった。そのことに人々が気づき、しかし気づくのが遅かったと思っていた頃だ。休眠状態に近いといった噂が流れる中、モンブランの手が、ミネルバに差し伸べられた。

腕時計の世界において、ミネルバの存在感は異質である。過去においては機械式腕時計の可能性を追求し、未来を拡げた存在であることは言うまでもない。しかしそれより、今日における価値が極めて高いだろう。ミネルバは、そのムーブメント製作を通じて、失われかけた機械式腕時計の価値観と体系、言い換えれば腕時計の文化を、現代に継承した。数十年間、基本的スペックを変更することなく造り続けられる、完成された極上の機械式ムーブメントは貴重で希少な存在だ。

クォーツ・ショックの前後、多くのメーカーが機械式から転向し、あるいは効率的な生産を図るためにスペックと設計の変更を余儀

なくされた。機械式腕時計の歴史には、60～70年代に大きな断層がある。ところがミネルバの事情は、ひとり異なった。世界のトップに立ったストップウォッチが経営を支えたため、ミネルバは踏みとどまることができたのである。機械式ストップウォッチが機械式腕時計を助けた。ミネルバの機械式腕時計は生産規模を大幅に縮小したが、伝統は維持されたのである。ミネルバのムーブメントは、現存する奇蹟である。その「保存された伝統」の神話性が再び脚光を浴びるのは、90年代に入ってからである。

ミネルバの高級ムーブメントは、技術的・美的に優れた腕時計の3つの伝統を固守している。「チラねじ付きの大型テンプ」「スワンネック付き緩急針微調整装置」、そして「ロービート」である。ミネルバのムーブメントは、毎時 18,000 振動にこだわっている。日本的な言い方では 5 振動（毎秒）、ヨーロッパ流に言えば 2.5Hz（ヘルツ）ということになる。現在、腕時計ムーブメントの主流が毎時 28,800 振動（8 振動 = 4Hz）であり、10 振動のムーブも使われている。12 振動のムーブメントも最近登場した。そこから考えると、ミネルバのムーブメントはいかにも「遅い」と思われるかもしれない。実際、毎秒 2.5 往復のゆったりしたバランスの揺れは、生身の動体視力でも追えるほどの、悠々たる動きを見せる。この事を指してミネルバのムーブメントを、「旧き良き時代の機械式」のように謳うことがあるが、実はそれだけではない。理由を知れば、18,000 振動のロービートは決して前時代的スペックではないことが判る。

1960 年代以降、多くのメーカーはハイビート化を進めた。ハイビートは容易に精度を出すことが出来、量産に向く。その過程で空気抵抗が大きいチラねじは排除されていった。ハイビートでパワーリザーブを維持するためには、空気抵抗が少なく、しかも小さなテンプが望ましいのだ。また、量産向きでないスワンネックも姿を消していった。ミネルバは

この傾向に無言で抗い続けた。ミネルバの自社製ムーブメントは、18,000振動のロービートを死守した。バランスホイールは大型のまま、高級仕様ではチラねじとスワンネックの採用を続けていた。実際のところ、バランスホイールの慣性モーメントを微調整すると、緩急針を微調整するスワンネックとチラねじさえあれば、ロービートのムーブメントはハイビートに決して劣らないのである。時計職人の熟練した調整にかかれれば、ミネルバのムーブメントはハイビート以上の精度を出すことができた。むしろ安定した高精度を出すには、チラねじ付きの大型のバランスホイールは非常に望ましい。今日でも、独立時計師などが自作するツールビヨンの多くは1万8000振動を採る。この理想の関係を維持するために、ミネルバはゆっくりとパワーを使うロービートに固執したのである。大型のチラねじ付きテンプを中心としたメカニズムを安定したトルクで維持するためには、ゆっくりとパワーを使っていくロービートが不可欠なのだ。ロービートを守るのは腕時計を愛する職人氣質の良心であり、見識だった。

本来ミネルバは100分の1秒を計測するストップウォッチで、ギネスブックにも登録されたブランドである。誰よりもハイビートを極めたブランドは、敢えてロービートに留まった。ミネルバにおいて、ロービートは特色なのではなく、長所なのだ。ロービートはノスタルジアではない。ミネルバは高級時計の伝統的な資質であるロービート、チラねじ、大きなテンプ、スワンネックという腕時計の偉大な遺産を、一体で守り抜いたのである。ちなみに、69年に登場した初の日本製クォーツは、機械式で言えば毎秒1万6384振動という超ハイビートということになる。ビート数を争う勝負は空しかった。多くの伝統メーカーが乗り越えられなかったクォーツ全盛の時代を、ロービートのミネルバは生き延びた。機械式腕時計の重要な伝統は、ミネルバによって世紀を超えることになる。

ミネルバのスタイルが完成されたのは、半

世紀以上も遡る1943年のことである。この年、アンドレ・フレイの手によって誕生したのが、黄金分割 (golden section 1:1.618...) を設計に採用したミッドセンチュリー・ムーブメントの傑作「Cal.48」=キャリバー48である。このムーブメントは、秒針のサブダイヤル (スモールセコンド) を表示するクラシカルなスタイルのためのものだ。キャリバー48を搭載したモデルは前述の通り、ピタゴール *Pitagore* =ピタゴラスと呼ばれた。

ミネルバはサブダイヤル秒針付きモデルを主力に置き、他のメーカーが中三針モデルばかりを生産する時代になっても、現行品としての発売を続行した。もっともミネルバは、中三針の自社製ムーブメントも製作していた。キャリバー49の名で知られるそのムーブメントは、キャリバー48の構造はそのままに、秒針をセンターに移行するためのギアを搭載した「出車式」を採る。

ストップウォッチで世界の頂点に立ったミネルバは、ストップウォッチ機能を持った腕時計=クロノグラフでも冴えを見せた。ミネルバの歴史上の傑作が自社製クロノグラフ・ムーブメントの「Cal.13-20CH」。通称キャリバー20と呼ばれるこのムーブメントは、高級クロノグラフの伝統であるコラムホイールを搭載し、確実な作動と堅牢性を誇る。ヴィンテージ市場で高い評価を得ているこの自社製ムーブメントは、長くミネルバの看板といえる存在だった。キャリバー20も18,000振動のロービートであり、高級仕様ではチラねじ、スワンネックが装備される、ミネルバらしいムーブメントである。視覚的にも、大型のチラねじ付きバランス、コラムホイール、スワンネックなど、機械式腕時計が築いてきた歴史を反映する美点が数多い。慣習的にブランドの名前が刻まれるクロノグラフ・ブリッジは、一目でミネルバ製と判る、ギリシャ文字の γ (ガンマ) に似た独特の形状。外見的にも、2つのプッシュピースがリユーズから大きく離れた特徴がアイコンとなって、一

目で識別できる。希少なキャリバー 20 搭載モデルは、今日でもオークションを賑わせる名機である。

4. 再生する神話

半世紀以上に亘って極上の機械式ムーブメントを造り続けるミネルバのエートスは、腕時計業界での敬意と、他にはない好意を得ている。事実、鋭い舌鋒で凡作を切り捨てる世界の腕時計ジャーナリストたちが、ミネルバのこととなると唇の緊張を解いてしまう。世界的な腕時計サイトである“TimeZone”が、2000年に自らの記念モデルの製作を依頼したのはミネルバだった。世界中の時計関係者やジャーナリストが集い、意見を交換するサイトからも、ミネルバは信頼を得ている。

実際、長年の腕時計ファンたちの多くにとって、ミネルバは最初に手に入れることができた、チラねじ付きテンプとスワンネック緩急針微調整装置が付き、ペルラージュとコート・ド・ジュネーブが施された「本当の高級機械式腕時計」なのである。腕時計のプロほど、ミネルバへの想いは強い。ミネルバは、腕時計に興味を抱き始めた昔日の心の昂りを思い起こさせる、象徴的なブランドの名なのである。日本においても、ミネルバは古くからの腕時計関係者には強く記憶されている。ただし、日本への入荷はそう多くはなく、実際に実物を手にした経験のある人間は限られている。特に60年代で生産を中止したキャリバー 20 搭載モデルについては、90年代に入ってのヴィンテージ時計ブームの中で再評価されたという方が正しいだろう。ミネルバの「Cal.13-20CH」はレマニア、アンジェラス製のムーブメントなどと共に「時計史に残る名品」と評価された。ちなみにレマニア社は、パテック フィリップ他の名門ブランドにクロノグラフ・ムーブメントを供給したヌーヴェル・レマニア社の前身である。

90年代に入って本格的に生産再開されたキャリバー 48 搭載モデルは、目の肥えた日本の腕時計ファンに熱狂的に歓迎された。イ

ンターネット上にファンサイトが登場し、ミネルバについての意見交換が活発に行なわれもしたのである。ミネルバファンの新しい世代が、この時期に誕生している。一方で、ミネルバの寡作ぶりは変わらず、日本への入荷数は限られていた。フレイ家が経営を離れたのをきっかけに、日本への供給は激減する。ミネルバは日本の時計ファンにとって、伝説の存在になろうとしていた。ミネルバとモンブランの歴史的邂逅のニュースは、まさにその時期に訪れたのである。

モンブランはミネルバを、最高の敬意をもって迎え入れた。まず設立されたのが「アンステイテュ・ミネルバ・ドゥ・ルシエルシュ・アン・オート・オルロジュリー」。直訳すれば「ミネルバ高級時計研究機関」である。ミネルバ研究所は腕時計の技術と文化を研究する一方で、モンブランに搭載されるハイエンドのムーブメントと腕時計を開発・生産する。ミネルバの行く末を最後まで心配していた人々にとって、この方針は意外とも思える、しかも歓迎すべき方向だった。経営に翻弄されてきたミネルバにとって、落ち着いてムーブメントの創作に打ち込める環境が最も望ましいことは明らかならう。

現在のミネルバは、モンブランの1部門でありながら「モンブラン傘下のミネルバ」という表現をされることが少なくない。吸収されて消滅したのではなく、今もミネルバは、ブランドの中にあるブランドのような存在感を見せる。それは、実態としては存在しないが崇敬の対象という意味で、明らかな神話性を持つものだ。現代において「もの」はただ「もの」であることだけでは、その価値を特定できない。ある手触りを持つものは、決して触知できない神性なしには物神たりえないだろう。その意味でミネルバは、明らかに腕時計の神話学＝ミトロジーを構成するのである。

【主要参考文献】

Icon Group International: "Montre: Webster's Timeline History 1498-2007", Icon Group International, 2010

笠木恵司, 並木浩一: 「腕時計雑学ノート—文字盤の裏側にあるのはムーブメントだけじゃない」, ダイヤモンド社, 2000

並木浩一: 「腕時計一生もの」, 光文社, 2002

並木浩一: 「男はなぜ腕時計にこだわるのか」, 講談社, 2008

並木浩一: 「腕時計のこだわり」, ソフトバンククリエイティブ, 2011